法雨山弘済寺蔵
木造 地蔵菩薩坐像
修理報告書
［本体］

2021年4月～2022年1月

三乗堂
SANJOU-DOU

修理前写真

図 1：全体（正面）

図 2：全体（背面）

図 3：全体（左側）

図 4：全体（右側）

修理前写真

図 5：本体（上面）

図 6：本体（底面）

概要

修理期間	2021 年 4 月～ 2022 年 1 月
名称	木造 地蔵菩薩坐像
指定文化財の種別	南足柄市指定文化財
員数	1 軀
所有者	法雨山弘済寺
所在地	神奈川県南足柄市弘西寺 131　弘済寺地蔵堂
所有者住所	同上
制作年代	鎌倉時代～南北朝時代 (14 世紀)
銘文	像内右体側部墨書（花押 2 個）、像内納入木札墨書（詳細は P21-23）
修理者	一般社団法人三乗堂（井村香澄、中愛、森﨑礼子）
施工場所	[redacted]
	栃木県鹿沼市下沢 732 番地　三乗堂工房
修理協力	修理アドバイザー：神奈川県立歴史博物館　学芸員 神野祐太
	胸飾修理：吉田泰一郎
	鋏復元：八重樫打刃物製作所
修理計画	本修理事業は、2021 年度「本体」修理、2022 年度「台座・光背」修理の計 2 カ年計画とする。本報告書は「本体」のみの調書・修理事業を扱う。本事業は、南足柄市と公益財団法人文化財保護・芸術研究財団より助成を受けて修理を実施した。

法量 ※修理後（単位 cm）

総高 (垂下部を含む)

総高 (頭頂～裳裾)	最大幅 (裳裾幅)	最大奥 (背面～裳裾)
89.2	79.2	57.0

本体 (垂下部を除く)

像高	髪際高	頭頂～顎	面長	面幅	面奥	耳張	肘張
65.3	59.1	21.3	14.6	12.6	18.1	16.7	38.2

膝張	胸奥 (右)	胸奥 (左)	腹奥	膝奥	像奥 (裳先～背面)	膝高 (右)	膝高 (左)
53.9	20.2	20.2	23.2	38.0	46.2	12.7	12.5

形状 ※調査時（神奈川県立歴史博物館　学芸員 神野氏の調書より）

円頂。髪際線をあらわし中央で湾曲する。後頭部にへこみをあらわす。白毫相。鼻孔を穿つ[図7]。人中を薄くあらわす。唇の上下の縁に一段刻みをあらわす。顎の括りをあらわす。耳垂部環状。耳孔を穿つ[図8]。三道相。

内衣、覆肩衣、衲衣を着ける。内衣は、左胸から右脇腹にかけてみえる。覆肩衣は、右肩にかかり、衲衣にたくしこむ。右前膊に懸かって体側に垂れる。袈裟（衲衣）は、左肩に懸かり少し右肩に懸かって右脇腹を通って正面にまわり、再び左肩に懸かる。正面では袈裟の縁を折り返し、折り返しは左肩を大きくおおう。

両手屈臂。左手は掌を上にして持物（蓮台付宝珠）をのせる。右手は掌を内に向け錫杖を執る。

結跏趺坐するが足の上下は衣に覆われて不明。

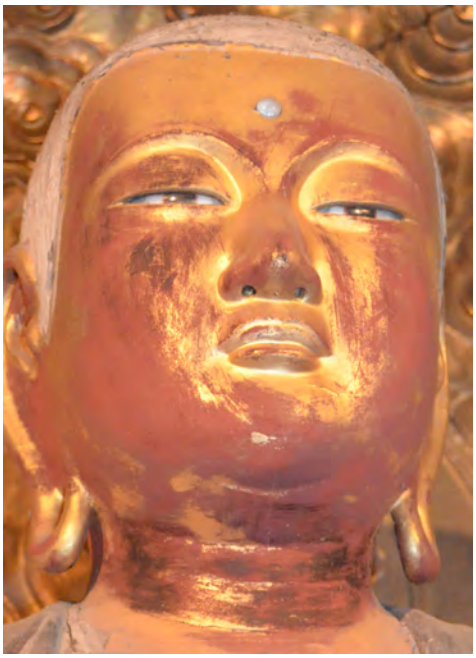


図 7：鼻孔

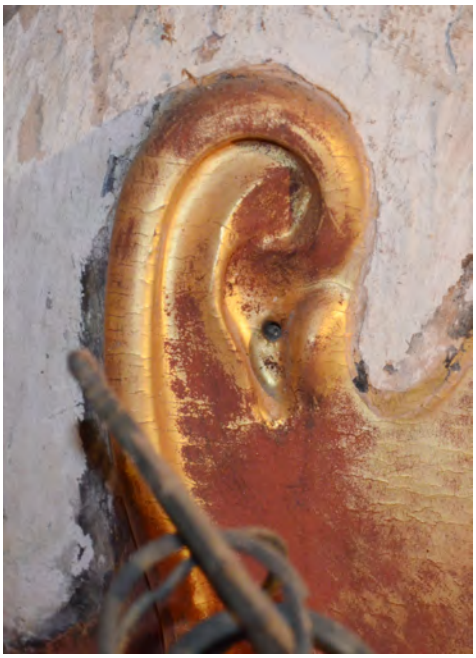


図 8：耳孔

図 9：左膝部の衣文

品質構造

針葉樹材（ヒノキ材か）。寄木造り。金泥塗り・古色塗り。玉眼。
頭体幹部は耳後ろを通る線で前後二材矧ぎ。内刳りのうえ、割首する［図10-11］。内刳りは後半材の底部を浅く刳り残す（上げ底式内刳り［図12］）。体部正面頸部以下に別材を貼る。大略一材で、左端に幅の狭い一材を補う。別材は底部を刳り上げるが、その際に前縁中央に像心束の基部をわずかに残す［図13］。左右肩先以下の体側部はそれぞれ前後2材を矧ぎ、内刳りする。幹部の割矧いだ後半材に合わせ、上げ底式内刳りとする。両脚部横木一材を矧ぐ。内刳り。両袖口、各左右2材を脚部上に矧ぐ。両手首先及び前膊下半、挿し込み矧ぎ。左は一材。右は手首で矧ぐ。裳先に別材を矧ぐ。

図 10：頭部の割首の様子

図 11：体幹部の割首の様子

図 12：上げ底式内刳り

図 13：像心束

保存状態・損傷状態

後補	白毫・玉眼［図14］。頸部に嵌め頭部の内刳りを塞ぐ小材［図15］、左手首先及び前膊下半、左袖口内側及び外側、右袖口内側、幹部の割矧いだ材底部張り板［図16］、以上後補。両脚部は後補とする意見もあるが、なお検討を要する。
欠失ないし亡失	左第4指［図17］、右袖口外側［図18］、右側腿部（鼠害箇所）［図19］、左側腿部材と衣［図20］、以上、欠失ないし亡失。
表面仕上げの後補	頭髪部の白色彩色下地［図21］、肉身部の赤色下地金泥塗り［図22］、着衣部の古色塗り（下層に弁柄漆の層［図23］、金箔の層［図24］を認める）、像底の布貼り漆塗り［図25］、以上後補。
脱落	左右前膊及び手首先が脱落していた。
虫損	体幹部、両脚部の表面と像底に虫穴が多く見られた［図26］。
汚れ・剝落	全体に埃が付着し、着衣部に所々白色の液体汚れがあった［図27］。頭部の白色箇所［図28］、肉身部［図29］、漆箔箇所［図30］に剝落が見られた。右手と左手指先は緑青が生じ［図31］、右手の矧ぎ目には接着力を失った充填剤の剥離が見られた［図32］。
その他	鉄釘・鎹に錆が生じていた［図33］。左右前膊内側の袖は竹釘のみで固定されていた［図34］。体幹部と両脚部をつなぐ枘穴に小材が嵌入されていた［図35］。
付属品	胸飾（銅製。表面に彫金で筋彫りを施す。ガラス玉と木製の玉を配する）後補（左方の垂飾亡失［図36］）。持物（宝珠の代わりの球［図37］、錫杖［図38］）、各後補。錫杖の柄の表層剝離［図39］。

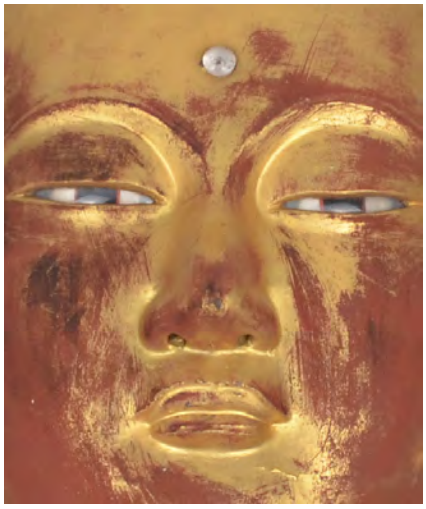


図 14：白毫・玉眼

図 15：頭部の小材

図 16：像底の張り板

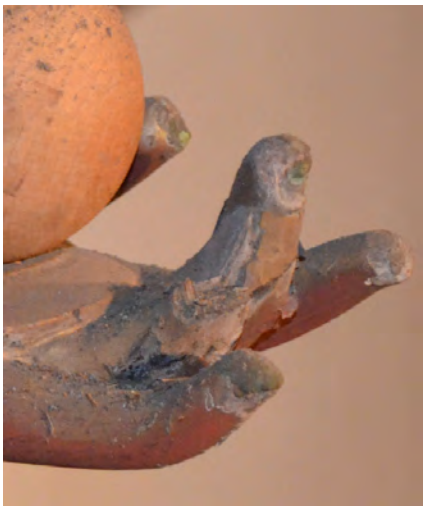


図 17：左手第 4 指　欠失

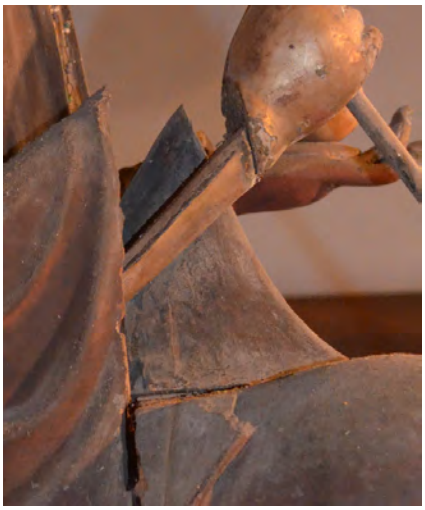


図 18：右前膊袖外側　亡失

図 19：鼠害箇所

図 20：虫喰箇所

図 21：頭髪部の白色彩色

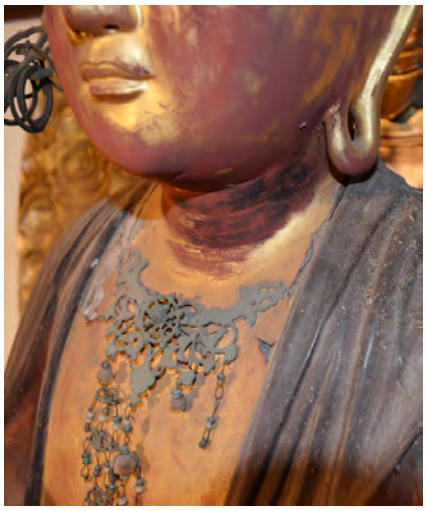


図 22：肉身部の金泥

図 23：弁柄漆の層

図 24：金箔箇所

図 25：像底の布貼り

図 26：像底の虫穴 (幹部)

図 27：着衣部に付着する白色液体

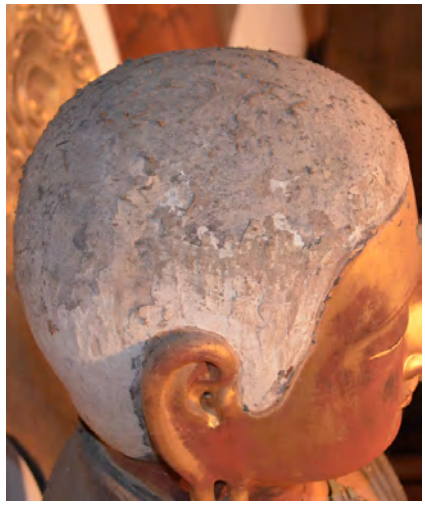


図 28：頭部の白色箇所

図 29：肉身部 (首元) 剝落

図 30：左指漆箔　剝落

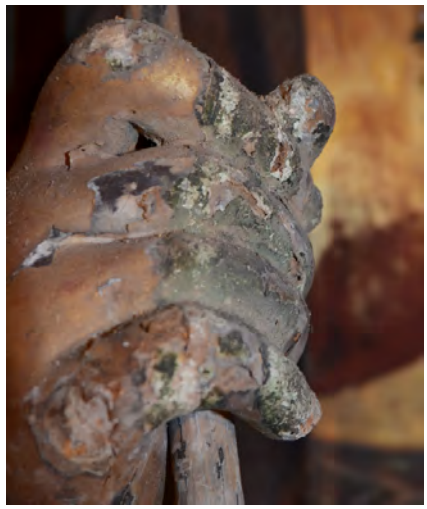


図 31：右指　緑青汚れ

図 32：右手　後補の充填剤

図 33：像底　鎹

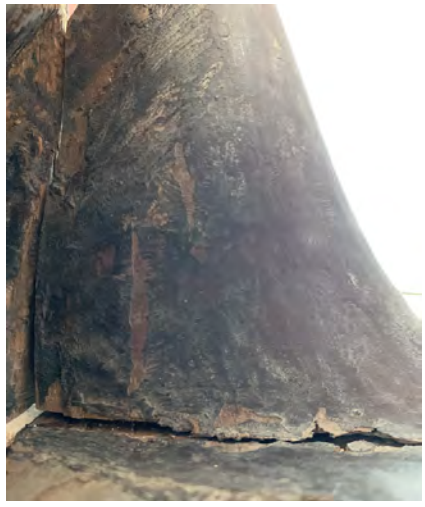


図 34：左前膊内側の状況

図 35：幹部の枘穴に嵌まる小材

図 36：胸飾左側　欠失

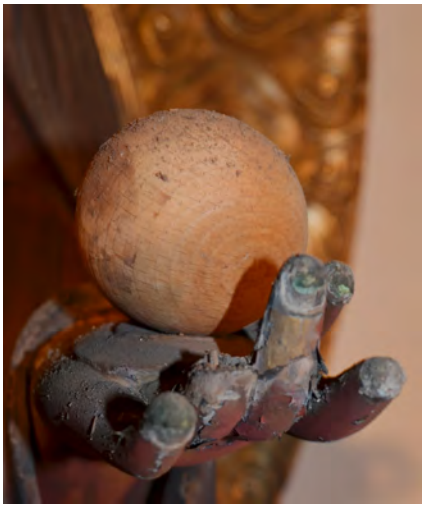


図 37：持物（宝珠）

図 38：持物 (錫杖)

図 39：錫杖の柄　剝落

修理方針・仕様

全体に堆積した埃を除去する。虫害などにより脆弱になっている箇所は薬剤で補強する。
欠失している左第 4 指、右側腿部の鼠害箇所、左側腿部と衣を含む箇所に生じた隙間はヒノキ材で補作する。また亡失している右前膊外側の袖、持物（宝珠）はヒノキ材で新補する。体幹部と両脚部を繋ぐ枘穴には小材が嵌入されているため、小材を撤去し枘を新補する。
接着が緩む頭部、右前膊、右前膊内側の袖、左前膊内側の袖、両脚部の左側底部の小材は一旦解体し、後補の接着剤を除去した後、再接着する。
矧ぎ目に伴い体幹部と両側材に生じた亀裂、体幹部と両脚部に生じる隙間に薄板のヒノキ材を挿入し、木屎漆を充填する。
錆びた釘や鎹を撤去する。
補作部材や再接着箇所はすべて膠で接着を行い、矧ぎ目に木屎漆を充填した後、周囲の色味に近づけた補彩を行う。

主な処置［図 40-41］

1.乾式クリーニング_P.10
2.湿式クリーニング_P.10
3.部分解体_P.11
4.膠湿布_P.11
5.剝落止め_P.11
6.含浸強化_P.12
7.釘、鎹撤去_P.12
8.部材撤去_P.13
9.木屎漆、麦漆除去_P.13
10.虫穴埋め_P.14
11.補作、補強_P.14
12.木屎漆_P.15
13.組み立て、接着_P.15
14-1.仕上げ(本体)_P.15-16
14-2.仕上げ(持物)_P.17
15.胸飾_P.18

図 40：正面の主な処置箇所

図 41：背面の主な処置箇所

修理材料一覧

・無水エタノール〈健栄製薬株式会社〉

・精製水〈健栄製薬株式会社〉

・膠〈商品名：三千本和膠「飛鳥」　旭陽化学工業株式会社〉

・セルロース〈商品名：メトローズSM1500　信越化学工業株式会社〉

・ブタノール〈商品名：1-ブタノール、n-ブチルアルコール　林純薬工業株式会社〉

・ブチラール〈商品名：BM-2　積水化学工業株式会社〉

・胡粉〈商品名：白雪印　ナカガワ胡粉絵具株式会社〉

・生漆〈商品名：日本産上生漆　株式会社堤淺吉漆店〉

・黒呂色漆〈商品名：日本産研出上黒呂色艶消（無油）　株式会社堤淺吉漆店〉

・箔押し用の漆(赤呂色と生漆を混ぜた漆)〈商品名：日本産粘口研出上赤呂色　株式会社堤淺吉漆店〉
※生漆は上記の漆と同じ

・弁柄漆〈商品名：練り合日本産研出上赤呂色艶消（無油）・弁柄（美術の友）　株式会社堤淺吉漆店〉

・砥の粉〈商品名：山科赤砥の粉　株式会社堤淺吉漆店〉

・金箔、金泥〈商品名：金箔3号断切　株式会社中村製箔所〉

・アクリル絵の具〈ホルベイン画材株式会社〉

・弁柄〈商品名：クツワ印弁柄（美術の友）　戸田互業株式会社〉

・黒化液（硫化液）〈画材・ものづくりアートロコ〉

修理工程詳細

1. 乾式クリーニング

全体に堆積した埃を筆で除去した[図42-43]。

図 42：左手　乾式クリーニング前

図 43：左手　乾式クリーニング後

2. 湿式クリーニング

全体に付着した経年的な埃や汚れ・シミを精製水とエタノールの混合液（1：1）を綿棒にしみこませ除去した[図44-45]。また右手は緑青が生じる箇所のみレモン果汁を併用し、精製水とエタノールの混合液でクリーニングを行った[図46-47]。

図 44：両脚部　湿式クリーニング前

図 45：両脚部　湿式クリーニング後

図 46：右手　湿式クリーニング前

図 47：右手　湿式クリーニング後

3. 部分解体

頭部、右前膊、右前膊内側の袖、左前膊内側の袖、両脚部の左側底部は接着が緩んでいたため湿式クリーニングを行いながら解体した[図48]。

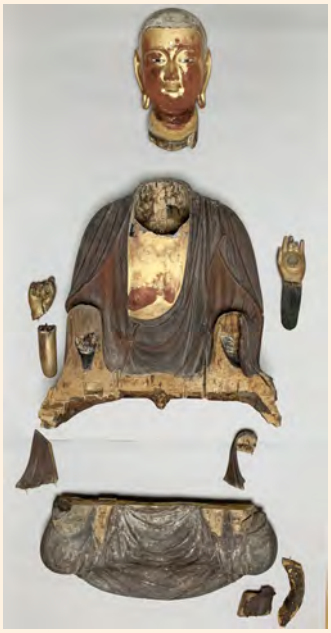


図 48：本体　解体後

4. 膠湿布

頭部の白色彩色の剝落が著しいため、膠水（2%）をしみ込ませた脱脂綿で汚れを吸い出しながら彩色層を定着させた[図49-50]。膠湿布後、セルロース（2%溶液）を全体に塗布しさらに彩色層の定着を図った[図51]。

図 49：頭部　膠湿布前

図 50：頭部　膠湿布中

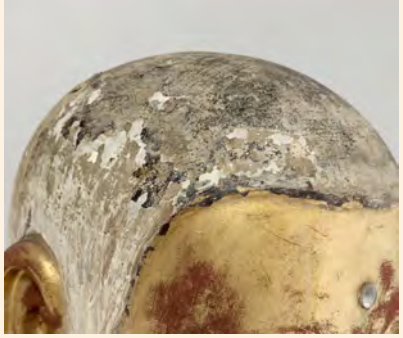


図 51：頭部　膠湿布・セルロース塗布後

5. 剝落止め

遊離した彩色層にセルロース（2%溶液）を塗布または隙間に注射器で注入し、圧着した[図52]。

図 52：剝落止め処置中

6. 含浸強化

虫害などにより脆弱になっている箇所はセルロース（2%）を注射器で浸透させ、補強した［図53］。

図 53：含浸強化処置中

7. 釘、鎹撤去 / 鎹新調

表面に露出していた錆びた鉄釘［図54-55］・鉄鎹を撤去した［図56-57］。錆予防のため、鎹はステンレス製での復元を八重樫打刃物製作所に依頼した［図58］。焼き漆を施し、元々打ち込まれていた3ヶ所に打ち直した［図59］。

図 54：頭部　割首部分　釘撤去前

図 55：頭部　割首部分　釘撤去前後

図 56：像底　鎹撤去前

図 57：像底　鎹撤去中

図 58：撤去した鎹（上）と新調した鎹（下）

図 59：像底　鎹を打ち直した様子

8. 部材撤去

首の小材［図60-61］、体幹部と両脚部を繋ぐ枘穴に嵌入されていた小材［図62-63］を撤去した。

図 60：首　小材撤去前

図 61：首　小材撤去後（および頭部内の玉眼固定の様子）

図 62：枘穴の小材　撤去前

図 63：枘穴の小材　撤去後

9. 木屎漆、麦漆除去

崩れやすい木屎漆を除去した［図64-65］。接着の妨げになる麦漆は表面が平滑になるように処置した［図66］。

図 64：右手　除去前

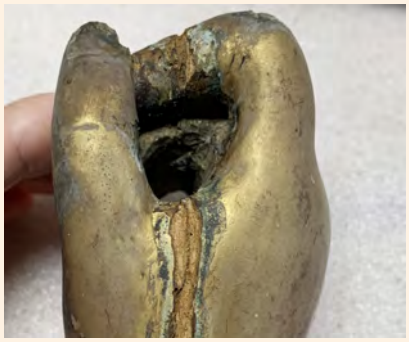


図 65：右手　除去後

図 66：左前膊　処置中

10. 虫穴埋め

体幹部の虫穴が多い脆弱な箇所は、含浸強化後、ブタノール・ブチラール樹脂・砥の粉を混合した充填剤を注射器で虫穴に充填した[図67-69]。

図 67：像底　充填処置前

図 68：像底　充填処置中

図 69：像底　充填処置後

11. 補作、補強

欠失した左第4指[図70]、右側腿部の鼠害箇所[図71]、左側腿部材と衣 [図72]をヒノキ材で補作し、膠で接着を行った。亡失箇所の右前膊外側の袖[図71]、持物（宝珠[図70]）をヒノキ材で新補した。両脚部の裳先が脆弱なため、補強材を取り付けた[図73]。また体幹部と両脚部を繋ぐ枘穴に嵌入されていた小材を撤去したため、新補した[図74]。体幹部と両脚部に生じている大きな隙間にヒノキ材の薄板を貼り組み付けた[図75]。

図 70：左手第 4 指と宝珠

図 71：右側　腿部と前膊外側の袖

図 72：左側　腿部の矧ぎ目と衣の一部

図 73：両脚部裳先の補強材

図 74：体幹部と両脚部を繋ぐ枘

図 75：体幹部と両脚部の隙間材

12. 木屎漆

小さな欠失箇所や補作部材との境界、木屎漆を除去した箇所に木屎漆を充填し、自然な形に整えた[図76]。

図 76：右手　木屎漆処置中

13. 組み立て、接着

部分解体を行った箇所や接着が切れた体幹部と両脚部を膠で接着し、組み付けた[図77-78]。

図 77：像底の部材　膠接着

図 78：体幹部と両脚部　接着中

14-1. 仕上げ（本体）

補作箇所や虫穴を充填した箇所、仕上げ層が剝落して木地が露出する箇所は、捨て膠(2%)を塗布した後、墨を混ぜた胡粉で下地を施した[図79-82]。肉身部(首元)は、膠で溶いた弁柄を塗った後[図83]、金泥を塗り仕上げた[図84]。

着衣部は、経年により漆の艶が失われ、全体的にマットな質感の漆だったため、

錆漆で古色の下地を作った後[図85-87]、アクリル絵の具による補彩を行った[図88]。

両手は漆箔(左手は一部金泥か)と判断し、修理箇所に弁柄漆を塗り[図89]、漆箔した[図90]後、アクリル絵の具による古色を行った[図91]。

図 79：胡粉下地　正面

図 80：胡粉下地　右側

図 81：胡粉下地　背面

図 82：胡粉下地　左側

図 83：首元　弁柄

図 84：首元　金泥

図 85：右袖外側　錆漆による古色下地

図 86：肩　古色前

図 87：肩　錆漆による古色仕上げ

図 88：右袖外側　アクリル絵の具による補彩

図 89：右手・左手　弁柄漆

図 90：右手・左手　漆箔

図 91：右手・左手　古色

14-2. 仕上げ（持物）

錫杖は表面の凹凸が目立つため、胡粉が露出する箇所や凹みが大きい箇所は木屎漆を充填し平滑にし、全体に胡粉下地を施した［図92］。

漆を塗り［図93］、漆箔を施した［図94］後、上からアクリル絵の具で古色を行った［図95］。

新補した宝珠は、拭き漆・錆漆・漆塗りの順に漆工程［図96-98］を行い、漆箔を施した［図99］後、アクリル絵の具で古色を行った［図100］。

図 92：錫杖の柄　胡粉下地

図 93 錫杖の柄　艶消呂色漆

図 94：錫杖の柄　漆箔

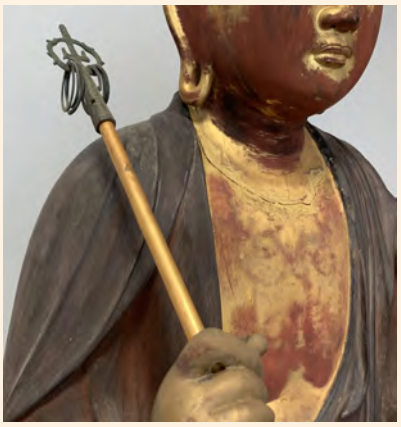


図 95：錫杖の柄　古色

図 96：宝珠　拭き漆

図 97：宝珠　錆漆

図 98：宝珠　艶消呂色漆

図 99：宝珠　漆箔

図 100：宝珠　古色

15. 胸飾

頭部の首元に固定されていた釘を撤去し、取り外した[図101]。全体に付着した経年的な埃や汚れ・シミを精製水とエタノールの混合液（1：1）を綿棒にしみこませ除去した[図102]。胸飾の左部分が亡失していたため、金属作家の吉田氏に金属部材の復元を依頼[図103-110]。ガラス玉も現存のものに合わせてガラス棒から制作し、また左部分の木玉に欠失箇所があったため、復元した[図111-116]。

図 101：取り外した後

図 102：クリーニング後

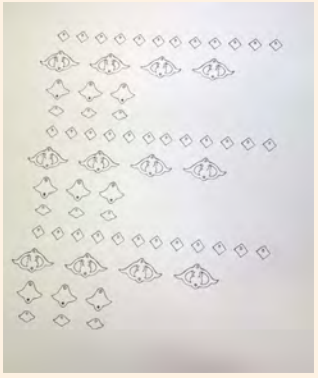


図 103：図面作成

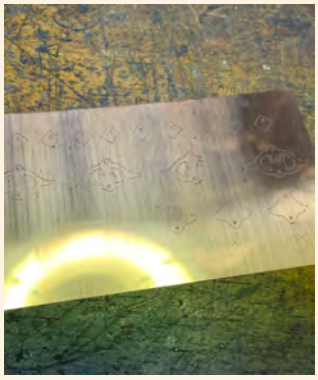


図 104：銅板に図面転写

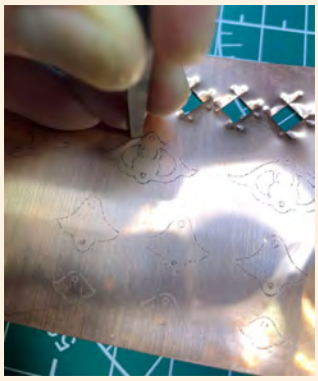


図 105：鏨で切り取る

図 106：切り取った部分を金メッキ

図 107：緑青を蒸すための下地作りの硫化染め

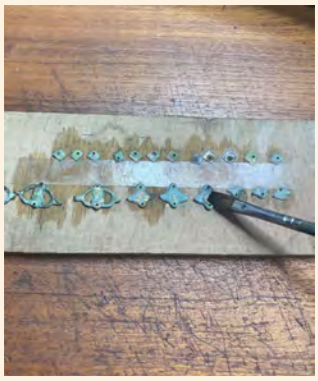


図 108：緑青着色

図 109：古色作業

図 110：金属部品完成

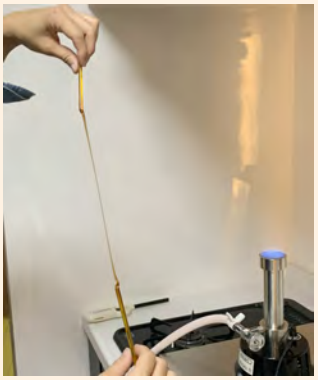


図 111：細いガラス棒作り

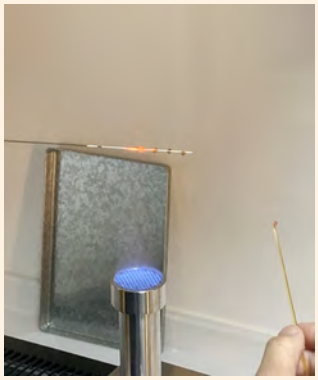


図 112：ガラス玉作り

図 113：完成したガラス玉

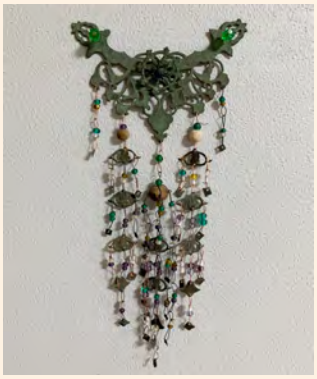


図 114：組み立て

図 115：古色

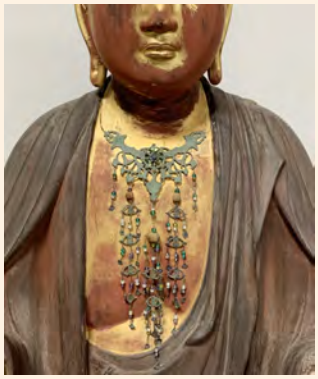


図 116：完成

墨書・花押

像内右体側部2箇所に花押、像内から納入品を確認することができた[図117-118]。

図 117：像内にある花押の位置関係

図 118：納入品が納入されていた様子

像内右体側部に見られた花押[図119-120]。

図 119：花押

図 120：花押

修理銘札 ※翻刻（鎌倉国宝館館長　山本勉氏より）

像内の木札から墨書が確認できた［図121-122］。

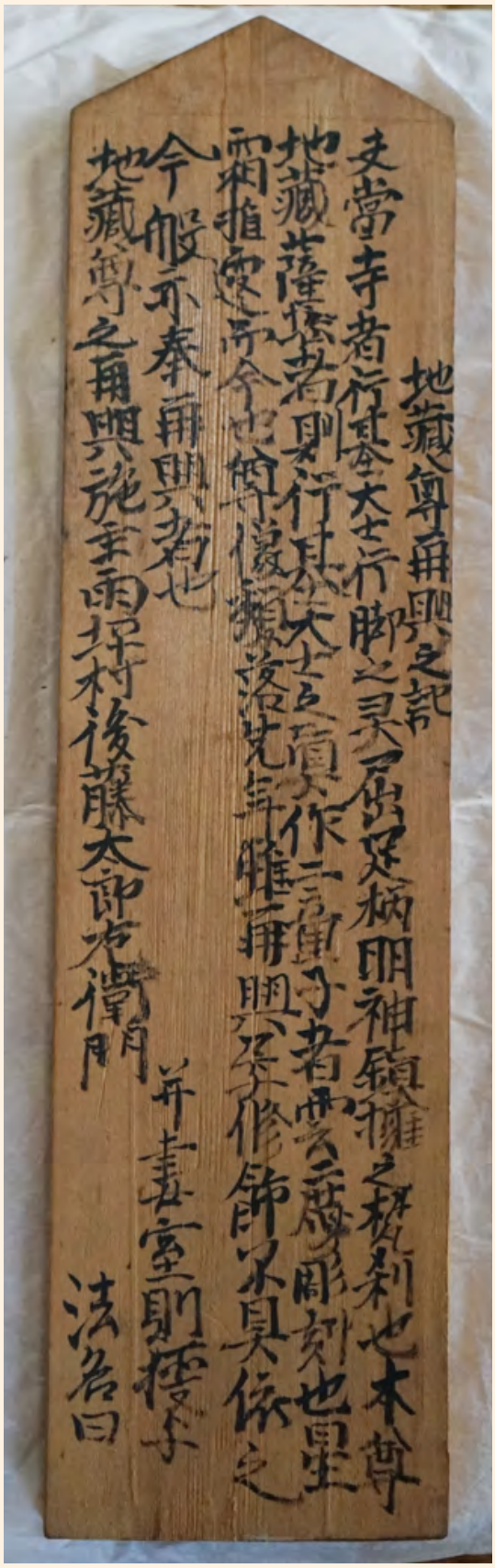


図 121：納入品　表面

（表）

地蔵尊再興之記

夫当寺者行基大士行脚之霊屈足柄明神鎮擁之梵刹也本尊
地蔵薩埵者則行基大士之真作二童子者雲慶彫刻也星
霜推遷而今也尊像頽落先年雖再興畢修飾不具依之
今般亦奉再興者也
地蔵尊之再興施主雨坪村後藤太郎左衛門　并妻室則授与
法名曰

（裏）

故心常温居士
伴故妙温大姉　各霊位
元禄十三庚辰年六月上旬
相模国足柄上郡前野荘弘済寺村法雨山弘済寺金剛幢院現住
法印権大僧都大阿闍梨覚源　欽修

鎌倉仏師後藤勘弥

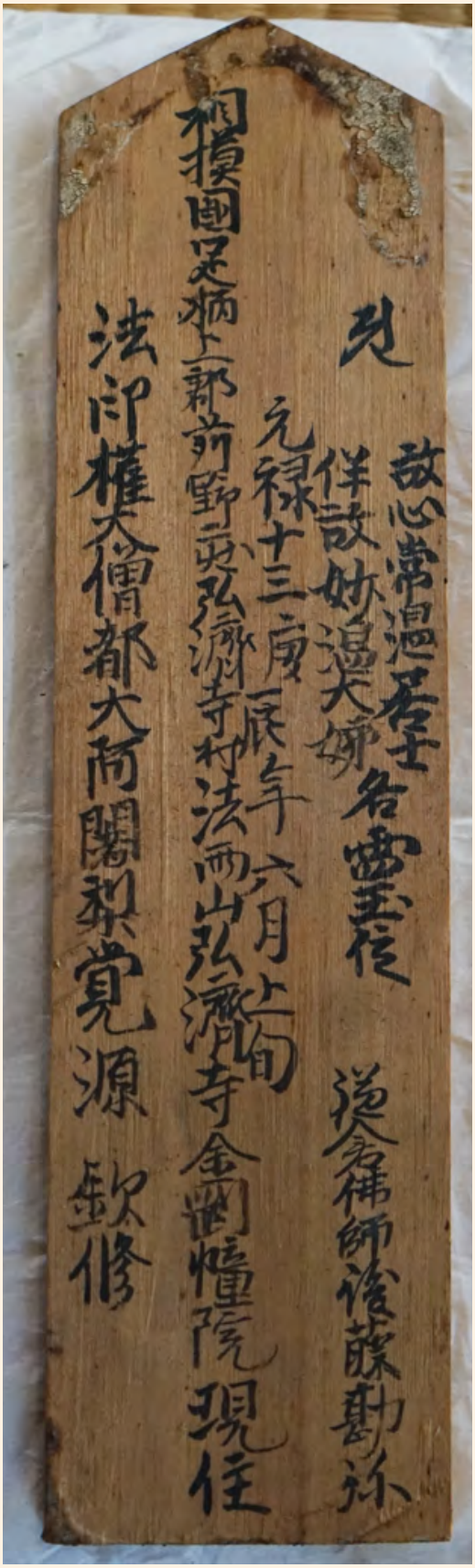


図 122：納入品　裏面

修理者所見

1. 漆が用いられていない充填剤（木屎）について

湿式クリーニングで簡単に除去ができたことに加え、木屎漆に見られる小麦粉のような白く濁った色がなく透明度があったことから、矧ぎ目の充填や塑形に用いられた充填剤[図123]は漆を使用していない木屎と推測する。木粉と練り合せている素材は不明。

今回の修理方針が部分解体であり、残存する木屎をすべて除去することはできなかったため、安置する環境の湿度が高くなりすぎないよう留意して頂きたい。

また修理期間中、乾燥により構造線（矧ぎ目）にヒビが生じた。充填剤が今後も環境によって動く可能性があるため経過観察を行いたい。

図 123：漆が用いられていない充填剤

2. 錫杖の持ち方

裳裾（中央部材）上面にある直径1mmほどの小さな穴[図124]は、元々錫杖の底部断面に設けられた穴[図125]と竹釘などで固定するために設けられたものと考えられる。しかし、①錫杖を持つ右手に負荷がかかること②同時代の地蔵菩薩坐像と比較し形式が一般的ではないこと、の2点から現状の穴は採用せず錫杖の先端を補作[図126]することとした。

図 124：裳裾（中央部材）上面の小さな穴

図 125：錫杖先端の穴

図 126：錫杖の補作

3. 修理痕

小材を寄せて彫刻している箇所[図127]や、着衣部表面の下部層に弁柄漆[図128]や金箔[図129]が見られることから、過去に修理が行われたことが推測される。

※納入品の修理銘札に記載されていた元禄13年(1700年)の修理痕かどうかは定かではない。

図 127：小材を寄せている袖

図 128：過去の修理痕　弁柄漆

図 129：過去の修理痕　金箔

修理後完成写真

図 130：全体（正面）

図 131：全体（背面）

図 132：全体（左側）

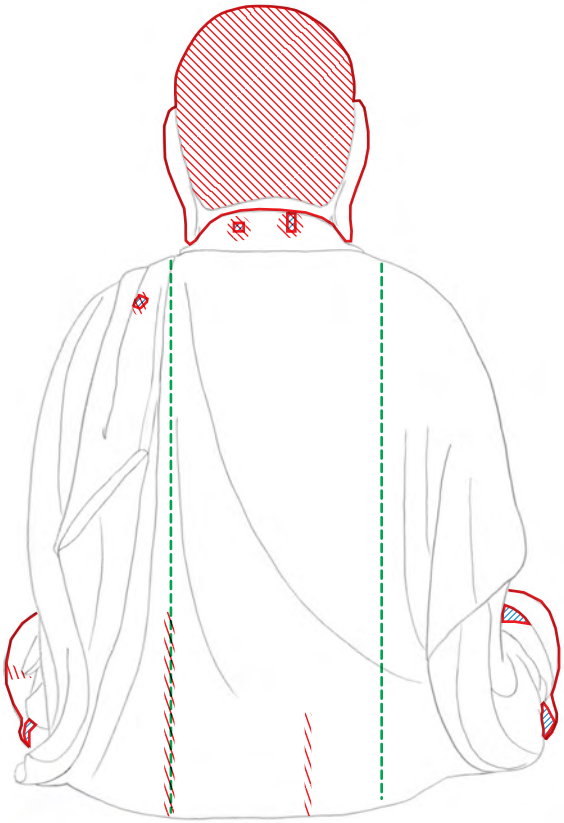
図 133：全体（右側）

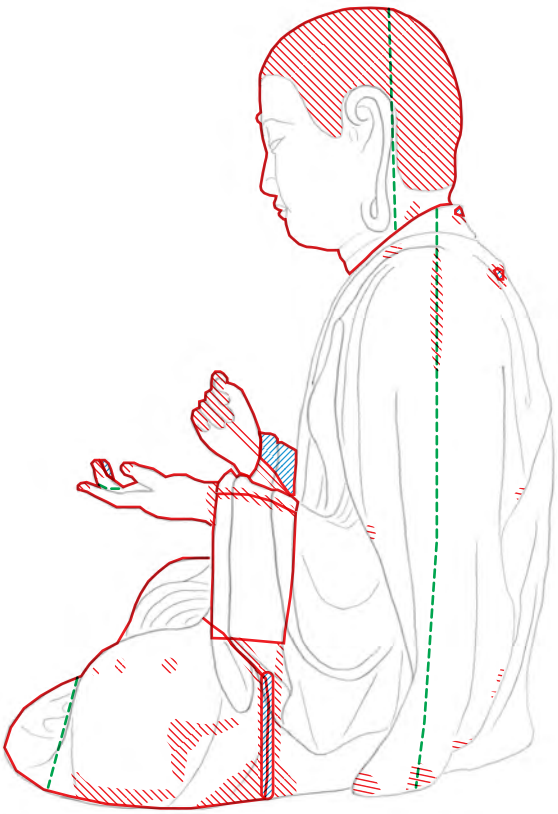
修理後完成写真

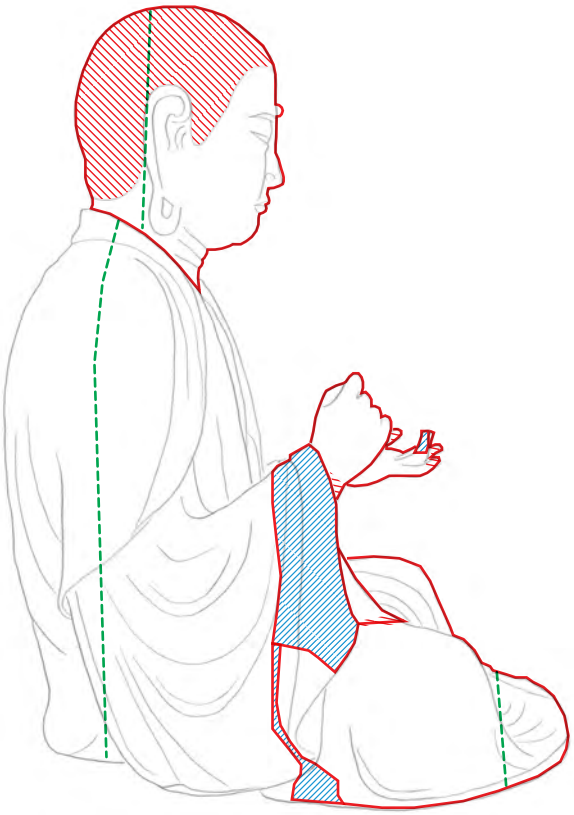
図 134：本体（上面）

図 135：本体（底面）

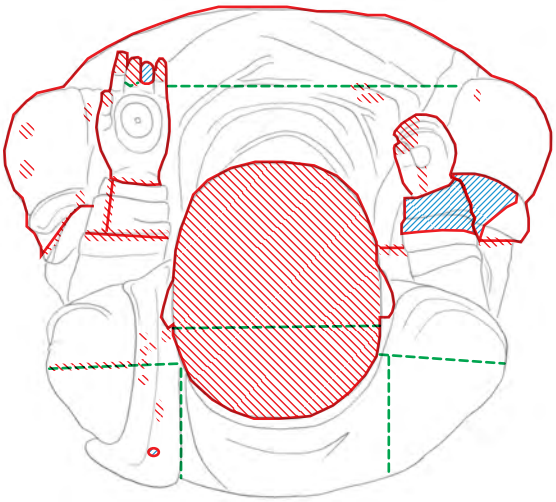
修理箇所図解

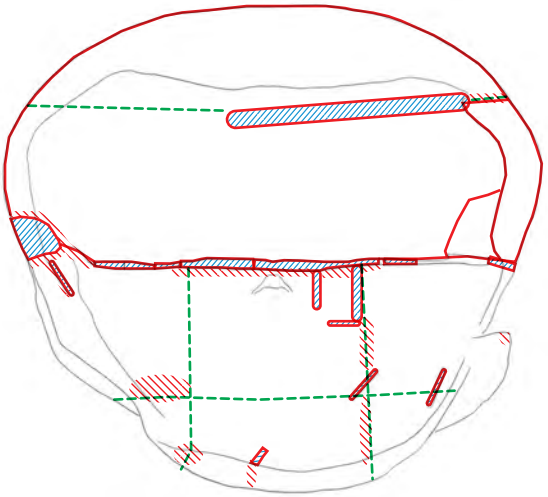


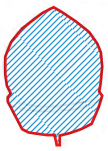


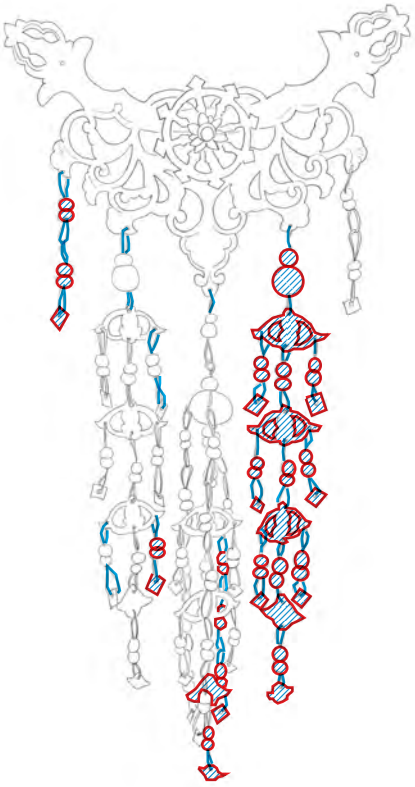


修理箇所図解









凡例

・主な修理処置箇所　・新補箇所　・解体または接着箇所　・矧ぎ目（確認できた箇所のみ記入）

法雨山弘済寺蔵
地蔵菩薩坐像修理報告書

報告日：2022年1月19日
発　行：一般社団法人三乗堂

一般社団法人
三乗堂

〒322-0256
栃木県鹿沼市下沢732番地
Tel:0289-78-4809
Mail:info@sanjoudou.org